

第 40 回土木計画学研究発表会（秋大会）：2009 年 11 月 21 日～23 日（金沢大学）
セッション討議内容の記録

| | |
|--|--|
| セッション名： 地域計画 | |
| 日付： 11 月 22 日（日）曜日、セッション時間： 9:00 ～ 10:30 | |
| 司会者名（所属）： 北詰恵一（関西大学） | |
| 討 議 内 容 | <p>セッション全体：</p> <p>本セッションの名前は、地域計画となっているが、対象課題は個々に異なる。</p> <p>最初の発表(発表番号 169)「単一中心都市における住宅地の開発と建て替えおよび撤退の動学的空間パターン」は、筆者ら研究グループが開発してきたモデルを用い、都市における住宅地の開発と撤退の空間的パターンの全体像を表現した。例えば、撤退が郊外から発生する場合とは別に、効用増加率が高いときに撤退が都心から発生する場合もあること等を説明している。</p> <p>次の発表(発表番号 170)「都市集積・分散ダイナミクスと確率的均衡」は、Core-Periphery モデルの均衡選択問題において、いずれの均衡解が選択されるかを確率的に予測できるようにし、地方部における都市間交通整備により地方都市の人口・資本が集積するのか吸い取られるのかという問題を例に、枠組み提案と安定性評価を行った。</p> <p>最後の発表(発表番号 171)「「連携」に着目した持続可能な生活圏形成に関する一考察」は、持続可能な生活圏形成のための手順、手法、留意点を検討し、データ分析やヒアリング手法を用いて強み・弱みを明らかにする等により、ケーススタディ対象である銚子地域の発展方向性を提案した。</p> <p>これらの発表の共通点は、都市、生活圏、地方圏といった圏域の違いはあるものの、人口減少下における地域の変遷を説明したり実態を捉えたりすることで、地域計画の新しい考え方の提案を試みている点である。これらの研究が引き続き進められ、大きな貢献をもたらすことを期待したい。</p> |
| | <p>(発表番号) 発表者名 (所属):(169) 福島サヤカ (東北大学)</p> <p>効用増加率のモデルにおける役割、解釈、実際の社会状況との関係などが議論された。また、開発・建替を考える上で重要な住宅の耐久期間とロットサイズの変更タイミングなど、各要因の時間スケールの整合性について議論があった。その上で、都市圏の多様な撤退メカニズムが表現されている本モデルの今後の開発への期待が寄せられた。</p> |
| | <p>(発表番号) 発表者名 (所属):(170) 西山秀紀 (東北大学)</p> <p>システムの安定性を判断する確率分布の理由、解釈について討議があった。また、規模の小さい都市でも集積の可能性があるという結果と、現実社会での状況との関連について議論された。そして、同モデルにおいていずれの均衡解が選択されるかを明らかにしたいとの開発意図と、地方部における地方都市の活性化に寄与したいとの研究の動機が説明された。</p> |
| | <p>(発表番号) 発表者名 (所属):(171) 大門創 (財)計量計画研究所)</p> <p>県全体に広がると思われる非日常の買物圏や銚子を中心としたプライド圏など、多様で重層的な圏域の提案があった。また、「連携」に着目した具体的な点とその方法論、さらに、行政単位を基礎においた圏域による今までの分析との違いを明らかにすべきとの指摘があった。そして、圏域にこだわらず、注目すべきテーマに基づいた分析の重要性が指摘された。</p> |